

# 《2008年10月例会報告》

【日時】2008年10月30日（木）19：00～21：00（その後「ルン」～2：00）

【会場】筑波大学附属高校3F会議室

【テーマ】北京、ロンドン、そして東京へ

- 2016年東京オリンピック・パラリンピック招致委員会の挑戦 -

【話題提供者】相原正道（東京オリンピック・パラリンピック招致委員会）

【参加者（会員）】相原正道（東京オリンピック・パラリンピック招致委員会） 麻生征宏（学研） 阿部博一（R&A） 石坂友司（大学教員） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 白井久明（弁護士） 中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）】 征矢範子（筑波大学附属高校） 今泉基信・藤岡友彦（筑波大学附属高校 サッカー部トレーナー）

【報告書作成者】朝倉雅史（筑波大学大学院 / 未会員）

注1） は初回参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 北京、ロンドン、そして東京へ

### - 2016年東京オリンピック・パラリンピック招致委員会の挑戦 -

話題提供者：相原正道

\*\*\*\*\*

#### <目次>

1. オリンピックとは
2. オリンピックと日本の関係
3. 2016年東京オリンピックに向けた招致活動とその現状
4. 招致活動の進め方  
    <質疑応答>
5. 2016年東京オリンピックのコンセプト  
    - 「人を見て、育て、緑を守り、都市を躍動させるオリンピック」そして「結ぶ」
6. 施設の再利用 世界一コンパクトな会場計画
7. 東京で行う意味 招致活動における最大の問題「世論の支持率」

## 1. オリンピックとは

お忙しいところお集まりいただき、ありがとうございました。麻生さんにお手伝い頂いた『教育読本』が、皆さんのお手元にあります。今日は東京オリンピック・パラリンピックの招致活動ということでお話をさせていただきます。お手元の資料をごらんください。

この間、北京オリンピックが終わりました。47億人が見るといえるのは、やっぱりスポーツの大イベントであると言えます。オリンピックというと、よくある言葉では、平和、フェアプレー精神、チームワーク、友情、努力、平等な、あるいはレガシーですとか…。最近この辺がすごく怪しいところですが、そういったことを含んでいるのがオリンピックです。

かつて我々も、1964年に東京オリンピックを一度やっています。今回は、また違う形で考えながら、招致活動を進めています。東京オリンピックは1964年10月10日に開会されました。この日を記念して現在も体育の日として残っています。このときの状況としては、首都高速ができた、東海道新幹線が開通したり、高度成長の柱として大きな大会として残っているのではないのでしょうか。今回は北京が同様な形で言われていました。それがオリンピック、北京オリンピックのイメージです。東京はこれとは違う形でやっていこうと考えています。

## 2. オリンピックと日本との関係

オリンピックと日本の関わりについて、簡単に歴史をおさらいしておきます。筑波大の附属高校でこういうお話をさせて頂くのは本当に感激なんですが、それは、一つは僕自身が筑波の大学院で学ばせていただいたことがあります。そして、嘉納治五郎先生、1909年に日本人としてアジアでも初のIOC委員になられた方で、柔術家としてももちろん有名な方ですが、この方は教育者としても有名で、筑波大学の前身である東京高等師範学校の初代校長でもあったのです。

1912年の第5回ストックホルム大会から日本が参加しました。1940年には、幻の東京オリンピックがありました。1940年ということからわかるように、戦争のため中止になった大会です。そして1964年に東京オリンピックが盛大に行われました。冬の大会としては、1972年に札幌冬季オリンピックが行われ、1998年には長野冬季オリンピックが行われました。

ここで忘れてはいけないのが、1988年のソウルオリンピックの際、名古屋が立候補、招致活動をしていたことです。残念ながらソウルに、韓国に比べて良いかもしれませんが、負けてしまいました。そしてもう一つ、今回の北京オリンピックの際も、大阪市が立候補してオリンピック招致活動を2001年に行っていました。やはりこの時も北京に負け、しかもこのときの票数が6票しか入らなかったということです。惨敗でした。

日本という国の第3の都市と第2の都市が負けたわけですので、第1の都市であり、首都である東京が名乗りを上げているというのが現在の招致活動です。

## 3. 2016年東京オリンピックに向けた招致活動とその現状

次のページをご覧ください。ここからは、どうやって招致活動を行っていくのかお話をさせていただきます。

オリンピックのサイクルということですが、オリンピックは4年に1度、冬と夏が中間年にありますので、2年に1度大きな大会があると思われがちですが、その間に必ず開催地を決定するIOC総会をメインイベントとして持っています。冬と夏の間には次の冬の会場を決め、夏と冬の間には次の夏の会場を決定するというのが「オリンピックサイクル」と呼ばれているものです。必ず年に1度大きな形でIOCの委員が動くことがあるということです。

東京の場合は、2009年の10月2日に決定するのですが、2016年大会の東京開催を目指して、今年は一先懸命がんばっているのが現状です。

東京がねらう2016年のオリンピックで現状として言われていることを簡単にまとめました。2008

年は北京オリンピックで、その次の次の大会であるということ。当たり前ですが、ロンドンを挟んで次はどこになるんだろうというところで決められます。現在、4都市が立候補都市として残っており、開催地決定は10月2日。コペンハーゲンでのIOC総会です。

2016年までの開催都市のスケジュールです。2007年9月13日に立候補申請締め切りが終わり、2008年1月14日に申請ファイルを提出しました。今年の6月に立候補都市の絞り込みが行われ、4都市に絞られています。このとき、東京が1位通過してニュースになりました。この後は、立候補ファイルの提出を2月16日に控えております。ここに向けていま、私どもの招致活動は最大限の活躍をしなくてはならないとがんばっている最中です。『教育読本』がそうなんですが、皆さんに支持してもらうためにもがんばっている最中です。

これから多分4~5月になるでしょうが、IOCによる世論調査が日本でも行われることになっています。やり方は極秘ですが、電話調査などで行うのではないのでしょうか。また、IOCの方が現地調査にいらっしゃいます。4月14日から5日間ほど滞在することが決定しています。どこに行くかといった詳細は未定ですし、僕らにもまだ情報としては来ていません。ただ、来る日の割り当てが決まったということです。

4~5月に、開催都市の第1回プレゼンがあります。ここはプレ・プレゼンとなりますので、立候補都市の内容をプレゼンするような形で考えており、10月2日の開催都市決定の時に、また大きなプレゼンがあり、ここで投票します。前回のロンドンの話で言いますと、当初はパリ有利の下馬評でしたが、ロンドンが最後ベッカムを出し、アン王女が出てきて、締めにはブレア首相が政府保証をしたことによって逆転したというのがメディア等の論調でよく言われていることです。まさにそういったロンドンの勝ち方だったと思うんですが、このような選挙、最後のプレゼンテーションが非常に注目を浴びているところです。

現在残っている立候補都市は、東京、シカゴ、リオデジャネイロ、マドリッドです。プラハ、パクー、ドーハの3つも、申請はしていましたが候補都市にはなれずに終わっています。

1つだけこれまでと変わった経緯があります。得票数で順位づけするのですが、東京、マドリッド、シカゴ、ドーハ、リオデジャネイロの順だったのです。本当はドーハが3位だったんです。しかし、IOCとしては夏にやってほしいのですが、ドーハは暑すぎて10月開催案だったんです。このあたりが原因となって、平均点は高かったのですが、ドーハは立候補都市にはなれず、リオが代わりに上がって4つが争っているのが現状です。

#### 4. 招致活動の進め方

オリンピックの招致活動とはどのようなものなのかについてよく聞かれるので、まとめてみました。いつ、誰が、どのように決めるかということです。2009年10月2日のIOC総会で、IOC委員111名の投票による多数決で決まります。1票ずつ持っていますので、選挙活動は111名のIOC委員に対する活動であるということです。

2008年9月現在のIOC委員の内訳です。アジア、オセアニア、ヨーロッパ…。フランスのクーベルタン男爵が始めたスポーツ競技ですので、貴族の方々が多く、ヨーロッパの方々が多くなっているのが現状です。こういった色々な国の方がやっておられます。競技種目別にみると、陸上、サッカー、水泳、スキー、このあたりが人数も多いです。人気競技にIOC委員が多いというのが現在のIOC委員の構成です。

2012年のオリンピック大会は、ロンドン、パリ、マドリッド、ニューヨーク、モスクワと、首都ばかりで決選投票が行われました。オリンピックの投票はノックアウト方式でやっていきます。1回目の投票で、1番得票数の少なかったモスクワが落ちます。次に2回目を4都市で行い、ニューヨークが落ちる。その次にマドリッドが落ち、最後はパリとロンドンの決選投票となってロンドンが勝ったという経過です。

冬季のときの決選投票は、ソチとピョンチャンとザルツブルグの3つで争いました。まずザルツブルグが落ち、次の決選投票でソチとピョンチャンの得票数が、ソチが51、ピョンチャンが47でした。1回目の得票では、ピョンチャンが36、ソチが34だったので、2回目の投票で1位と2位が逆転しています。どういうことかということ、ザルツブルグの票をどちらが獲得したかということが非常に重要だということです。第1候補でどこに投票するかという事ではなく、今のオリンピック招致活動は、第2、第3、自分が押している都市が負けた後、どこに入れてもらうかというのが選挙活動の中で重要なものになっています。しかもその得票は、ブリーフィングで何かできるという時間は全くなく、コーヒブレイクもないくらいトン、トン、トン、トンと一気にいきますので、そのときのイメージ、今までの、どこかの国を応援しているからその人は1票入れてくれないといけないというのは全くなく、どこかの国がダメだったら必ず日本に入れてもらおうとか、そういった2手も3手も先のことをやっておくのが招致活動で重要になってきています。

### < 質疑応答 1 >

中塚：ここまでのところで何か質問がありましたらどうぞ。

参加者：今の最後のところですが、得票数を足しても委員数に足りないんですけど、これは棄権とかそういうことですか？

相原：立候補都市がアメリカだったらアメリカのIOC委員は参加できないので、数のブレが出ています。自分で入れるのは分かっているのでそこは除外されています。

## 5. 2016年東京オリンピックのコンセプト

### - 「人を見て、育て、緑を守り、都市を躍動させるオリンピック」そして「結ぶ」

2016年の東京オリンピック、パラリンピックのコンセプトとして、スローガンとして掲げているのが、「人を見て、育て、緑を守り、都市を躍動させるオリンピック」ということです。東京オリンピック、パラリンピックは地球社会への贈り物ということで、開催期間なども徹底した形でIOCにも提出しています。

2016年7月29日の金曜日から8月14日の日曜日まで競技を行います。この期間にしたのは、日本の夏休みに合わせるため、ちょっと暑い時期でもあったんですが、それが大きな理由です。あと7月29日が、統計上、晴れの日が多かったというのも理由の一つです。その後のパラリンピックも、同じ施設を使いながら、8月31日から9月11日まで行おうとしています。スポーツを通じて希望を与え、都市を躍動させる、地球環境の再生を図ることを目指して招致活動を行っています。

それをもたらすものとして、スポーツ文化が社会に根付く健康な社会、多様な生活が緑と水に囲まれた美しい都市、交通、最先端セキュリティ、低環境負荷の機能的な都市、障害者・高齢者・子ども・外国人などのすべての人に優しい社会、世界と繋がり世界と作る開かれた平和な社会、ちょっと漠然としたスローガンチックな事を考え、基本計画の中に盛り込ませていただきました。

招致用語のコンセプトとして、僕らの名刺に必ず入ってくるロゴなんですけれども、五輪の上に入ってくる「結び」のことですね。「結び」のことは色々なコンセプトを持って作っています。まず日本国民みんなを結ぶ。東京だけではなく、日本全体を結ぶという意味をこめた。あと、結ぶということは非常におめでたいことなので、結婚式などに使われる結び方というものです。あとは、僕らの願いや招致活動が実ってオリンピックが来てほしいという願いを結んでいます。また、もう1度日本の人と世界の人を結ぶための結ぶという意味で、こういった標語をスローガンの中で展開しています。

オリンピック招致大使として、みのもんたさんや山下泰裕さん、有森裕子さん、星野仙一さん、またCMなどで萩本欽一さん、野口健さん、古田敦也さん、伊達クルム公子さんをお願いしています。

## 6. 施設の再利用 世界一コンパクトな会場計画

2016年の計画は、日本のコンセプトということでコンパクトな配置を打ち出しています。逆手にとって世界一コンパクトにできる会場を計画しています。北京では全部新しい施設で、北京だけで四国とおなじくらいの面積があるので、非常に距離感がありました。

ベストパフォーマンスを出すために、アスリートが必ず言うのが、会場への近さです。選手村から8キロ以内、20分で移動できることを検討し、計画を立てています。そして幾つかのゾーンを考えています。既存施設を再利用するゾーン、新しいウォーターフロントの開発されたゾーンと2つあるのがゾーンの特徴で、選手村とメディアセンターとメイン会場、その中心部を結ぶように形成しているのが東京の会場計画です。その3施設とは、メディアセンターとオリンピックスタジアムと選手村を、いま計画中です。東京体育館や日本武道館、国立霞ヶ関競技場もそうですが、1964年の東京オリンピックで使った会場を改修しながらもう一度使おうと。

世界の方々が来て驚かれるのが、1964年に使ったところを日本人はまだ使っているのかということです。やっぱり「もったいない」の精神があって使ってきたというのが、外国からの評価が高い一因ではないでしょうか。いま、IOCの中でもレガシイ（遺産）と呼ばれているんですけども、昔のものを今でも使っている日本人の「もったいない」の精神がここに出ているではないかなど。それと、東京国際フォーラムです。有楽町のまん前にあるんですが、ここではウェイトリフティングを行う。いまある箱物でもオリンピック会場として仮設で作るという計画を立て、あるものを利用しようということ。いまある7割のものをそのまま流出して使ってしまうというのが東京のやり方です。

臨海部は、ここもユースプラザや夢の島競技場、辰巳の森京浜公園、夢の島公園など、いまも国際大会等を行っているところが多いのですが、ここらあたりも有効活用しながら使っていきたいと思えます。

あと、有明テニスの森公園でもテニスを行います。ピックサイトではフェンシング、ハンドボール、テコンドー。うまくこの会場空間を使いながら仮設で客席を作り、その場でやって、その後は元通り復旧するという、東京のもとある建物での活用法を考えています。

お台場海浜公園では、トライアスロンを計画しています。

あと、潮風公園でビーチバレーをやるかと考えています。ここも仮設です。大会後は元通り普通の公園に戻すことを考えています。この発想は日本人だけでなく、今度のロンドンでも採用されています。ロンドンは霧の都で曇りが多く、まずビーチがありません。それでどうするかというと、バックingham宮殿の前に仮設のビーチバレーボール場を作って実施するそうです。エンペラーのお膝元でビーチバレーをやるという、ロンドンらしいんですけど、自分たちのお膝元を利用して実施してもらってまた元に戻すという発想。いまオリンピックは、お金を掛けずにどれだけできるかということで、こういった発想で行われているのが現状です。

葛西臨海公園のセーリング会場は作らないといけないんですが、470級などの種目を行うために必要なものを作ることになっています。それと、臨海部の会場ということで、中央防波堤の柵のところでボート、カヌー、プラトータル、水泳、10km マラソンが行われたり、海の森で馬術、クロスカントリーを行ったり、中央防波堤側の埋立地マウンテンバイク、クロスカントリー、BMX を行う予定です。ここに行くとはわかりますが、本当に単なる砂のある更地です。この後の東京都の計画では、土を盛ってオリンピック会場にするんですけど、大会後は「海の森」として生き返らせるというのが日本の環境選択の一つです。ここを森にして風を都心に送ろうということで、少しでもヒートアイランド化を避けるようにしていくことを考えているということ。です。

大井競馬場では近代五種、大井埠頭の中央京浜公園ではホッケーを行います。8キロ圏内に入らないものを挙げると、射的は日本人には馴染みませんので、1964年と同じく陸上自衛隊の朝霞訓練所で行います。あとサッカーの場合はチーム数が多いので、全国のスタジアム、札幌、埼玉、東京スタジ

アム、横浜国際、大阪長居等を使って行う予定です。新設はオリンピックスタジアム。代々木公園ではバレーボールを行うことを考えていますし、葛西臨海公園、若狭のカヌーと中央防波堤に一部改修するものを作るということで、以上5箇所作る方向で、あとは全てリユースする形でやっていきます。

会場は全てユニバーサルデザインを配慮していますので、パラリンピック競技としても問題ない大会運営を行っていききたいというのが現状です。あと、8キロ圏内、20分の話の強調として、「結びクラストー」と真ん中を呼んでまして、既存のものと新しいものを、過去と未来を結び、1964年と2016年をうまく結びながらやっていこうというのがポリシ - であり、レガシイという形です。

## 7. 東京で行う意味 招致活動における最大の問題「世論の支持率」

2016年の招致実現に向けて、立候補都市の順位付けで、どういう項目があってどういう評点を付けられたのかを示したものを持って来ました。

インフラについては、一般的インフラが2位、競技会場も2位、オリンピックの選手村が1位で、宿泊施設や輸送関係も2位で安全施設。これは治安も含みますね。過去に開催したスポーツ大会も2位で、そのあと財政で全体計画とのレガシイと言うところが2位で、一つだけ4位の項目があるんです。政府保証、法的問題、世論という部分で、東京の場合は他の都市に比べてここだけ突出して低いです。ここが最大の問題で、世論の支持率が低い。例えば1位のマドリ - ドは90%世論が味方をしています。リオデジャネイロは78%、シカゴが77%で、東京は59%でした。

順位が入れ替わっているのは法的問題など全ての問題に関してですが、その中でも一番低い「支持率」を見ていきたいんですけど、調査では、オリンピックを東京でやる予定であることを知っている人は89%いるという結果が出ています。賛成は全国で62%、東京都は60%で、都民の方が低い結果が出ています。主な賛成理由は、一流の競技を間近で観戦したい、日本人選手の活躍を期待している、といったものが挙げられています。反対理由は後で述べさせていただきます。

1964年の時は、この数字が50数%だったらしく、このときの数字があまり悪いとはいえないのですが、ただ他との差があまりにも大きかったので少し見劣りがしたという感じです。

経済効果ということでは2兆8千億円の経済効果があるだろうと見込んでいます。基本的にはオリンピックに使う予算として3000億円とされていますが、これはスポンサー、チケット収入、テレビ放映権、グッズ収入などでまかなうのが東京の計画です。

反対意見としては、膨大な経費や、残された巨大施設の管理はどうするのか、交通の混雑などが挙げられています。また、北京オリンピックの8年後で本当に東京に来るのか、東京で2度目のオリンピックを開く理由は、お金の無駄遣いでは、という意見の方がいらっしゃいますし、優先順位の高い事業は他にもあるのでは、交通渋滞に拍車がかかる、東京では盛り上がり欠けるというのがいま挙がってきている意見です。

それに対する反論というか、お話をさせて頂くと、北京オリンピックの8年後。オリンピックサイクルでは、ヨーロッパ、北米、アジアというのがオリンピックサイクルです。最近はちょっと変わってきていて、1996年のアトランタ以降、北米開催が1回もありません。2001年のテロの影響が大きいということで避けられてきたのが実情ではないでしょうか。開会式では選手のほかに世界各国の首脳も集まります。そういったこともあって避けていると考えられます。

順番の話で言いますと、アテネ、北京、ロンドンと、欧州が続いたので、東京というのは十分可能であろうということで、周期が変わったということをお話したいと思います。2回目の開催は、名古屋と大阪が負けたので、福岡と東京で争って東京が勝って、他の立候補都市でも、ニューヨーク、モスクワ、マドリッド、パリ、ロンドン、といった世界の5大都市と言ってもいいほどの大都市が並んでいる中、どこが見劣りせずに日本でできるかと言ったら東京しかないだろうと。大都市回帰のオリンピックで環境政策を進める中では、やはり東京という都市が浮き立ってきているのが実態ではないでしょうか。

2012年のロンドンが3回目なので、2回、3回が多いということではなく、国としてくくると問題が変わるということなのかと思います。道路難については、いま東京の街中を走っている車のスピードを調査したところ、平均が18.8kmです。マラソン男子のスピードが20kmですので、それよりも遅いスピードで街中を車が走っているということは、国際社会から遅れている感があります。なぜなら、パリですら24kmです。少なくとも24kmで走れないとおかしいということで、東京都はこれをどう考えるかということで、環状線を3つ作って西からくるものを東に大きく抜けさせたり、東からくるものを大きく回って出そうという計画を立てています。これによって24kmを実現しようと言うのがいまの計画です。

もう1つ言えるのは、環状線を回すことで都市に車が入ってこないわけですからCO<sub>2</sub>の削減にもなるというのがいまの考え方です。オリンピックのあともインフラが進みますので、スピード流通が激しくなるというのがいまの考え方です。

それともう一つ、海の森の構想として、ヒートアイランド対策を考えた場合、緑を増やそうというのがいまの東京都の考えです。ドイツは山が近いので山風を都市に降ろしてヒートアイランドを避けようとしてきました。東京は関東平野というただ広い土地にあるので、山も遠く、そこからは風をもちこめません。ビル群があるのは大都市圏ですので、そこに海の風を持って来ようというのがいまの東京の政策としてあります。単純に、日陰に行くと涼しいと感じることからわかるように、大体4違うと言われていています。日陰を作る感じで、環境政策を進めていこうと思っております。

先程の緑の風の話ですが、海からの風を何とか呼ぶために緑をどんどん増やしていこうということで、川沿いや、公園、街路樹の垣根、道路整備も含めて緑の多い街にしていくということで実現しようと考えています。

それともう一つ、競技力の向上というのも、オリンピックが来る効果として考えています。ナショナル・トレーニングセンターのようにトレーニング施設が多くでき、大きいのはエリート教育やナショナル・コーチアカデミーができた、色々な情報流通の場になっているというのが一つ。それに向けて国際競技力の向上を図っているのが現状です。選手もコーチもレガシイですので、何とかその遺産を新しい人に引き継いでいこうというのが今の計画です。今度はオリンピックへの贈り物という、北島君がよく言ってくれるんですけど、多くの子どもたちにスポーツの楽しさを与えるということで、そういう意味でも2016年、彼らは東京出身ですので、何とか東京で行いたいと、先頭に立ってくれるのが彼らになってくると思います。

次は、オリンピックは人や社会を変える力がある、オリンピックをこの世代の日本人に経験してもらいたいということがあるんですけど、僕らだけの問題だけじゃなく、これから環境の問題とか出てくるにせよ、本当に大切なのは子どもたちだと思うんです。次世代の子どもたちにどういう遺産を残していくかということで、例えば「1964年のとき幾つでしたか？」と経験された方に聞きますと、必ず何年生だったとか何があったとか覚えておられます。今はそういうエポックになるようなことを子どもたちに伝えているかどうか、と言うことを考えると非常に急だと思ってしまうので、ぜひともこういうものを伝えていきたいと考えました。

色々な方々のご協力あつての招致活動だと思っているので、皆さんが呼びたいんだという意識を持って、僕らと一緒にやっていくのが本当の意味での招致活動だと思います。ネットワークというか色々な方々が支持してくれるような形をとらなくてはいけないということです。以上です。

このあとディスカッションとなり、熱いトークバトルは会場を変えて「ルン」まで繰り広げられました。記録上、掲載できない内容が多いので、本報告からは割愛します。